

# 漢文句法「書き下し文のルール」確認テスト | 定期テスト対策 | 誰でも古典塾 解答・解説

---

問1 我書を読む。

問2 学びて時に之を習ふ。

問3 「而」は順接（～て）を表す置き字で、ここでは独立した字としては書き下し文に書かない。送り仮名「て」（「学び+て」）に溶け込ませる。

問4 「これ」と読んで平仮名で書く（「之を」＝「これを」）。代名詞にあたる字なので漢字のままにしない。

問5 誤りは「而」を漢字のまま残している点。正しくは「学びて時に之を習ふ。」。「而」は置き字なので書かず、送り仮名「て」に溶かす。

問6 過てば則ち改むるを憚ること勿かれ。

問7 「則」（接続の「すなはち」）も「勿」（禁止の「なかれ」）も助詞・助動詞にあたる字（助字）であり、書き下し文では助字を平仮名で書くという原則に従うため。

問8 未だ嘗て有らざるなり。

問9 「未」は再読文字で、一度目は漢字「未（いま）だ」、二度目は平仮名「ず」。「也」は平仮名「なり」と書く。

問10 將に江を渡らんとす。「將」の二度目の読みは平仮名「とす」。

問11 虎穴に入らずんば、虎子を得ず。

問12 いずれも打消の助動詞で「ず」と読み、平仮名で書く（「入らず」「得ず」）。

問13 誤りは「不」を漢字のまま残している点。正しくは「虎穴に入らずんば、虎子を得ず。」。「不」は平仮名「ず」にする。

問14 虎穴（とらの住む穴）に入らなければ、虎の子は得られない。（危険を冒さなければ大きな成果は得られない、の意。）

問15 己に如かざる者を友とすること無かれ。

問16 「無」は禁止で「なかれ」（または「なし」）、「者」は「もの」と読んで、いずれも平仮名で書く。

問17 自分に及ばない（自分より劣った）者を友としてはならない。

問18 学は以て已むべからず。

問19 「可」は「べし」（ここは打消を伴い「べ」）、「不」は「ず」と読み、合わせて「べからず」。いずれも平仮名で書く。

**問20** 誤りは「可」を漢字のまま残している点。正しくは「学は以て已むべからず。」。「可」は平仮名「べ」にする。

**問21** 己の欲せざる所、人に施すこと勿かれ。

**問22** 書かない。「於」は対象（～に）を示す置き字で読まないため、書き下し文には書かない。対象は送り仮名「に」（「人に」）で示す。

**問23** 青は之を藍より取る。

**問24** 青色は藍（あいの草）から取る（が、もとの藍より青い）。〔学問や努力によって師を超える「出藍」のたとえ。〕

**問25** 事当に此くのごとくなるべし。「当」の二度目の読みは平仮名「べし」。

**問26** 朋友と交はる。「与」は「と」と読んで平仮名にする。

**問27** 書く。⑩の「於」は「より」と読んで意味を担うので、平仮名「より」として書き下し文に書く。⑨の「於」は読まない置き字なので書かない。「読む置き字は書き、読まない置き字は書かない」という違いである。

**問28** （記述・解答例）書き下し文では、（ア）之・者・也・不・無・可・与・而などの助詞・助動詞にあたる字は漢字のままにせず平仮名で書く。（イ）而・於・于・乎などの置き字は読まないので書き下し文には書かない（ただし「より」「に」などと読んで意味を持つときは平仮名で書く）。（ウ）未・将・当などの再読文字は一度目を漢字、二度目を平仮名で書く。さらに送り仮名は歴史的仮名遣いで添える。